

# 先祖が「生きていた」というリアルな証(あかし)

納骨堂の御遺骨移動作業を経て 住職

## 六十七年前の納骨事情

「今私がここに生きている」ということは、必ず先祖がいる、ということなのです。そんなことはだれもが百も承知でしょうが、私自身もその事を知識としてしか理解していなかったのです。

専宗寺の旧納骨堂は、完成当初からしばらくの間、遺骨を袋等に入れずにそのまま流し込んでいたようです。当時のことを覚えていらっしゃる方に聞くと、完成当時納骨堂の事を「お墓のアパート」と呼んでいたそうです。最初に納骨された遺骨は、お墓から取り出して再火葬されたものでした。ですからすでにそれぞれの方に分けることは出来ない状態で納められたのです。誰の遺骨かは過去帳に記載されました。法令により土葬が出来なくなったから納骨堂が出来たと聞いていますので、土葬が火葬になっただけでそれが当たり前だったのですね。

その後しばらくして、布袋からビニール袋で納めるとい形に変わっていったようです。布袋は経年劣化で破れてしまっており、ほとんど

が他の遺骨と混ざってしまっていました。

## 遺骨と向かい合う日々

それが再建であっても、納骨堂から遺骨を別の建物に移動(改葬)するのに、遺骨を利用者別に表にして、区役所に申請する必要(改葬許可申請)があったので、当時加入の皆様には申請書にご署名を頂きました。その表を作るのに、袋に入っていて取り出せる状態にある遺骨を一旦取り出して、遺骨に添付してある火葬証明書や法名紙を確認しました。その折に、損傷や汚れのあるビニール袋は新しいものに取り替えました。

その他多くの申請書類や手続きを経て区役所より納骨堂の廃止と経営の許可を得る段階で、今度は堂内の全ての遺骨を取り出す作業をいたしました。取り出し作業は墓石業者さんが代行することも聞いていましたが、とりあえず自分でやってみようと思い、若院とコガ仏壇の専務さん、その息子さんにも手伝ってもらいながら進めました。(作業の話は盛りだくさんなので省略します)何とか目標期限までに全ての遺骨をきれいに取り出して解体業者さんにバトンタッチする事が出来ました。

とにかくこの作業が終わるまでの約半年、遺骨と向かい合う日々が続きました。

## ふと感じたこと

当たり前のことなのですが、遺骨はとても似ています。大きさや量の大小や色などは多少違うのですが、見れば遺骨と大体わかります。そして大方の遺骨は誰のものかわかります。そんなことを考えながら作業をしていると、その遺骨はその時代を確かに生きていた人なのだ、ふとリアルに感じたのでした。これは門徒さんの〇〇さんのおじいさんだなぁ、これは〇〇さんの子供さんだなぁという風に。そのように考えると、ここにある全ての遺骨が誰かのいのちと密接に関係して実際に存在していた方々なのだ、という本当に当たり前の事なのですが、それがリアルに感じられたのです。

## リアルな証

納骨堂には少なく見積もっても千人分以上の遺骨が納められていました。その一人ひとりに人生があってその時代を生きられたはずですが、その「リアルな証」として遺骨があります。ただ、遺骨が残っていない方もおられます。先の大戦時に戦地で亡くなった方の標も多くありました。もっと古い方の遺骨も残っておりません。しかし、そのような方も確かにおられた、ということも、残っている遺骨が証明します。何より私が今ここにいる、ということが、過去につながる無数の先祖の存在証明なのです。



4月13日



6月12日

## 納骨堂の「ご本尊」と「ご先祖様」

浄土真宗寺院の納骨堂には、ほぼ全てにご本尊「阿弥陀如来」をご安置します。ここに阿弥陀如来の「一切を仏とする」という願いが成就された場所であるということをお知らせします。そして、今生のいのちを終えた方々は、その願いによって「往生」つまり極楽浄土に生まれ往生、浄土の聖衆、仏さまと成っていきます。だからこそ仏さまとなった先祖「ご先祖様」と掌を合わせます。

納骨堂は決して怖い場所ではありません。そこに遺骨が納められているご先祖様はもちろん、遺骨が納められていない無数のご先祖様方も皆仏となり、阿弥陀如来のように一切を仏とすると願い、今まさはたらい下さっているということをお知らせする場所なのです。

## 怖くない明るい納骨堂へ

この度の新納骨堂は、設計士とともに「子どもがひとりでも入っても怖くない納骨堂」を目指しました。人によっては怖いイメージがあるお墓や納骨堂ですが、ご先祖様を本来怖がる必要がない仏さまと感じながら、安心した時間を過ごすことができる特別な場所となるよう願っております。